

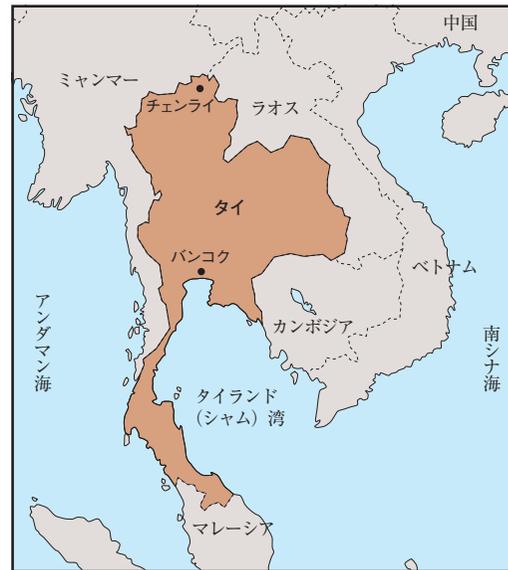
第4章

タイとカンボジアにおける
支援事業

1 タイにおける支援事業

タイ王国は、東南アジアに位置する立憲君主制国家で、その基礎は13世紀のスコータイ王朝より築かれ、アユタヤ王朝(14~18世紀)、トンブリー王朝(1767~1782)を経て、現在のチャックリー王朝(1782~)に至ります。そして1932年、立憲革命により現在の立憲君主制となりました。

日本とタイの両国は600年にわたる交流の歴史を持ち、伝統的に友好関係を維持しています。長年にわたる両国の皇室・王室間の親密な関係を基礎に、政治、経済、文化等、幅広い面で緊密かつ重層的な関係を築いていて、人的交流は極めて活発です。



《現在のタイ事情》(2020年10月現在)

●タイ王国

- 面積：51万4,000km²(日本の約1.4倍)
- 人口：6,641万人(2018年)
- 首都：バンコク
- 民族：大多数がタイ族。その他は華人、マレー族等
- 言語：タイ語
- 宗教：仏教 94%、イスラム教 5%
- 政体：立憲君主制
- 通貨：バーツ
- 産業：製造業(GDPの約34%)、農業(GDPの約12%)
- GDP(名目)：5,436億ドル(2019年、IMF)
- 一人当たりGDP：7,810ドル(2019年、IMF)
- 主要貿易品目：
 - 輸出：自動車・同部品、コンピュータ・同部品、機械器具、農作物、食料加工品
 - 輸入：機械器具、原油、電子部品
- 主要貿易相手国・地域：(2019年、タイ中央銀行)
 - 輸出：1. 米国(12.7%) 2. 中国(11.8%) 3. 日本(10.0%)
 - 輸入：1. 中国(21.3%) 2. 日本(14.1%) 3. 米国(7.3%)
- 在留邦人数：75,647人(2018年10月現在)
- 在日タイ人数：54,809人(2019年12月現在)

[1] メーコック財団への支援

● 教育の機会に恵まれない子供たちへの
教育支援を行う

メーコック財団(旧・メーコック・ファーム)は、タイ北部の小・中学校で教師を18年間務め、1991年にチェンライ郊外において観光による地域の発展のために活動しているタイ人のピパット・チャイスリン氏が、麗澤大学・竹原茂教授と聖学院高校・戸部治朗教諭の協力のもとに立ち上げた「現地の問題解決と生活の質の向上を目指したNGO」です。海外からのスタディツアーを通して現地の問題への理解者と支援者を得るとともに、訪問者に現地での体験の場を提供することで、相互理解に基づく協力関係を築いてきました。

当初は、麻薬患者の更生と職業訓練を目的として活動し、総計150名のうちの約70%の患者の麻薬中毒脱却に成功しました。主に山岳民族を対象に実施してきましたが、それだけでなく、併せて都市部の青少年を対象とした麻薬治療とリハビリテーション活動を行い、職業訓練やセミナーを通してさまざまな問題解決にも貢献してきました。

2000年からは、活動の重点を生活の質の向上に移して、教育支援活動をメインにさまざまな支援活動を展開しています。教育支援活動においては、貧しくて教育の機会に恵まれない総計125名の子供たちの教育支援(奨学金制度)を行ってきました。

また、貧困等により、教育を受けられない環境にいる山岳民族の子供たちをメーコック財団の施設内に受け入れ、



メーコック財団の入り口



ピパット・チャイスリン氏の野外講話



民族衣装で記念撮影



メーコック財団での清掃作業



メーコック財団内の食事



メーコック財団の寄宿舎で生活する小学生

メーコック財団代表
アノラック・チャイスリン氏

メーコック財団内の教会

学校教育による学業支援のみならず、基礎的な農業技術から養鶏、魚の養殖、ハンディクラフト等の技術や知識、経験の取得支援を行っています。そして、幼稚園児から中学生まで24名の山岳民族の子供たちがプロジェクト内で寝食を共にしながら教育を受けています。

2003年3月にタイ政府より財団法人「メーコック財団」として認可され、より安定した活動・運営とより充実した教育支援をめざし、また現地における諸問題の解決と生活の質の向上にいっそう貢献できるよう日々努力しています。

子供たちの生活

— 規則正しく、自主性を重んじる —

メーコック財団で生活する子供たちは、基本的に「自分たちのことは自分たちで」という方針で生活し、規則正しく、また自主性を重んじる毎日を送っています。学校教育による学業支援のほか、基礎的な農業技術から養鶏、溶接、建築、ハンディクラフトなどの職業訓練や知識取得への支援を受けています。

土曜日は、職業訓練の一環として畑の作業、溶接訓練などを行います。各自の当番の仕事や洗濯などが終わると自由時間になり、サッカーやセパタクロー（球技の一種）などで遊んだり、ギターを弾いたり刺繍をしたりしています。

日曜日については、午前中は教会へ行き教育を受け、午後は土曜日の自由時間のような過ごし方をしています。

このように多くの時間が、子供たちの「自立」のための訓練にあてられています。この中であって、子供たちは規則正しい生活を楽しみ、このような日々を送れることに感謝しながら元気に生活しています。

メーコック財団の現状

2020年、メーコック財団が新型コロナウイルスの感染拡大による影響を受けて運営が困難になったことから、麗澤海外開発協会 (RODA) ではこれまでの支援に加えて緊急支援を行いました。

タイでは2020年5月以降、感染者数は抑えられてきましたが、12月に入り1日300人前後の感染者が出たため、タイ政府は非常事態宣言を2021年2月末までに延長する方針を決定するなど、いまだに収束が見えていません。

タイ政府によりロックダウンが実施された後、メーコック財団への訪問ができなくなり、ゲストハウスとスタディツアーの収入が一切なくなりました。通常は、それらの収入の一部を子供たちの食費やスタッフの給料にあてていただけに、厳しい状況に置かれています。

タイの多くの子供たちは、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、自宅でオンライン授業を受けられるようになりましたが、メーコック財団の子供たちはほとんどが山間部に住んでおり、インターネットもないため、簡単ではありませんでした。その中であって子供たちは、勉強や訓練に励みながら生き生きと生活しています。

[2] バンコク・スラムへの支援

タイ王国は一定の経済成長を遂げる中、一方では大きな格差を抱えていて、それが構造的な社会問題となっっています。同国の首都バンコクには約2,000のスラムがあり、そこには約200万人が暮らしていて、不安定な生活を強いられています。そこで暮らす子供たちは児童労働に携わったりして、十分な教育を受けられずにいます。このように十分な教育の機会が与えられないまま成人になっても、就労機会が制限されるため、さらなる格差の拡大につながって



1歳のころからメーコック財団で暮らすファーストくんも元気に育っています



子供たちが絵を描いたギフトボックス





移動図書館で人形劇



移動図書館で紙芝居



モバイルラーニングセンター

います。これらの負の連鎖を断ち切るためにも、スラムにおける教育機会の充実が喫緊の課題となっています。

さらに、2020年からの新型コロナウイルスの感染拡大により、タイ国内の経済は大打撃を受けていて、もともと不安定な生活環境にあるスラム住民はあっという間に就労機会を失い、子供たちは生活することさえ厳しい状況に置かれています。

このような状況の中、JILAF (Japan International Labour Foundation - Thailand / 所長・関口輝比古) では、2020年度から麗澤海外開発協会の支援を受け、バンコクのオンヌット64小路にあるスラムへの教育支援事業を実施しています。このスラムにはミャンマー人の移民労働者(約400名)が居住し、その大人たちは主にゴミ集積所周辺での日雇いのゴミ拾いとゴミ分別の仕事に従事していて、学校に通えず親と一緒に働く子供たちもいます。また、他のスラムよりも衛生環境が悪く、健康に悪影響を与えていて、新型コロナウイルスの予防も十分ではなく、早急な支援を必要としました。

そこでJILAFを中心に、シーカー・アジア財団や国営企業労働組合連盟等による作業委員会を設置し、区役所やコミュニティリーダー等と連携しながら支援活動を進めました。2020年度は新型コロナウイルス感染拡大による度重なるロックダウンや行動制限(2020年4月頃から8月初旬、12月下旬から2021年2月中旬)があったため、活動実施期間が限られましたが、麗澤海外開発協会からの支援も加わり、以下の成果を得ることができました。

- ① モバイルライブラリー事業(計13回)を実施。スラムの子供たち(ミャンマー人50%、タイ人50%)に教育を通して将来への希望を与えることができ、子供たちの想像力を育て、集中力を高め、語彙を増やす等の効果がありました。
- ② モバイルラーニングセンターを設置。スラムのミヤ

ンマー人の子供を対象にミャンマー語のクラス(計6回)を設け、ミャンマー人の子供13人(男児5名、女児8名)にミャンマー語の読み書きを学ぶ機会を提供しました。

- ③ タイ人、ミャンマー人の青少年や大人を対象としたマスクや消毒ジェル、常備薬の配布と公衆衛生に関する教育(計5回)を実施。コミュニティ内の新型コロナウイルスの感染を予防することができました。

これらの事業について、関係者(コミュニティ、各家庭、区役所等)との緊密なコミュニケーションがとれたことから、関係者の事業、教育に対する関心、理解を深めることができ、コロナ禍の行動制限により限られた期間にも関わらず、スムーズに実施することができました。

JILAFでは、引き続き麗澤海外開発協会からの継続的な支援を受けることができ、これらの教育活動をいっそう充実させるとともに、今以上の教育活動(ミャンマー人子供達に対するタイ語教育の追加や失業したコミュニティの青少年、大人たちを対象とした職業訓練教育等)を推進し、コミュニティ内の生活向上と子供たちの将来の選択肢を増やせるような事業を進めています。

[3] タイ・スタディツアーを定期的に行う

2003(平成15)年からほぼ毎年、主にタイ・チェンライ近郊のメーコック財団を訪問し、山岳民族の子供たちと触れ合うタイ・スタディツアーを実施してきました。このツアーには、これまで学生・生徒・青年たちを中心に約120名が参加しました。参加者の多くは、訪問先の人たちとの交流や現地での生活体験を通して新た



日本大使館員がコミュニティ訪問



マスクの配布



メーコック財団の生徒とスタディツアー参加者

な気づきを得るとともに、国際協力への理解を深めています。ここに参加者の感想文の一部を抜粋して紹介します。

タイ・スタディツアー参加者の感想(抜粋)

- ◆タイ・スタディツアーに参加し、生まれて初めて真剣に、人に何かをしてあげたいと思いました。
- ◆私にとってこのツアーは、あらためて自分の行いを見つめ直す機会となりました。タイの人たちのように私たちも自国に誇りをもって、国際社会に名誉ある地位を占めることができるように努力しなければならないと思いました。
- ◆毎日快適な生活をしているのに、それよりもさらに快適な生活にしようとしている私たち日本人は、ほんとうにぜいたくな人間だなと思いました。
- ◆自分にはいったい何ができるのだろうと考えています。これからは自分にできることで協力していきたいと思います。
- ◆メーコックでの一週間は、自分の今の生活がどれだけ恵まれているかを考えさせられました。
- ◆メーコックの子供たちは、自分で責任を持って毎日の食事・洗濯・掃除などを積極的にこなしていて、感心させられることばかりでした。いかに自分が日本の生活の中で甘えながら生活しているか、いかに恵まれた環境にいるかを思い直し、日々の生活に感謝の気持ちを忘れてしまっていることを反省させられました。
- ◆私たち日本人はいかに幸せかということを実感する必要がある、と感じました。
- ◆テレビや電話のない生活や、水のシャワーのお風呂を体験し、鶏を初めて一羽さばいたことなど、日本ではできない貴重な経験ができて、すごくよかったです。子供た



ピパット氏(右)と竹原前副会長(中央)



ちとは言葉が通じなくても、心は通じ合えた気がしました。

- ◆子供たちを見て、“なんて明るく素直で、何事にも一生懸命なんだろう。そして、なんでこんなにきらきらと目が輝いているんだろう”と素直に感じました。
- ◆自分も子供たちといっしょに農作業をしたが、暑くて、虫が多く、日本の農作業と比べてほんとうに厳しい労働条件だと思いました。タイのアリは人をかみませんが、現地の子供たちを見ていると、それでも平気で作業をしていて、彼らのたくましさを感じました。
- ◆私はタイの中学二年生のクラスで日本語を教えたのですが、大声で発音してくれるので、教える自分も大声になりました。日本の中学生だったら、英語の授業でこんな大声は出ない。タイの彼らは、ほんとうに学ぶことを楽しんでいるように思えました。
- ◆「メーコックは、だれもが成長できる場である」と責任者のピパットさんが話してくれたのを思い出します。ここに来ると、いつも物に囲まれた便利な暮らしの中にいる人間から、ありのままに生きる人間に戻れる気がします。
- ◆恵まれた環境で育った私たちにとって、貧しくて不便な生活とすることも、そこで毎日暮らしている人々にとっては、それが快適な生活かもしれません。洗濯物を手で洗ったり、シャワーが水だったりというだけで大変だと思ってしまった自分を、とても恥ずかしく思いました。
- ◆メーコックでは、私たちと比べて確実に不自由な生活の中、子供たちがほんとうに純粋でたくましく、生き生きとしていました。人の心は物でなく環境に育てられるのだなと思いました。「メーコックでは、農作物とともに人も育てられる」というピパットさんの言葉が感動的でした。子供たちの家庭内事情にも驚きました。無邪気に笑って



ゴールドトライアングルで
(タイ、ラオス、中国国境)



竹原前副会長と麗澤大学生



象乗り体験

いる笑顔の裏には私の知らない世界があるのだろう、と胸が痛みました。

- ◆食堂のいすや机も子供たちが作ったと聞いて驚きました。子供たちは明るく元気で、つらい様子が見えませんでした。殺人や幼児虐待などの多い日本を考え、ほんとうの幸せとはなんだろうかと考えさせられました。
- ◆自給自足で生き生きと生活する子供たちをみて、便利さだけが人を幸せにするのではないと感じました。
- ◆山岳民族の生計は民芸品の手作りなどで営まれているが、それだけでは生活は苦しい。村人が貧しいために、子供の教育にまで手が回らないのです。親は麻薬に手を出し、麻薬中毒になり、お金を麻薬に費やさざるを得なくなり、さらに貧しくなります。そうすると子供が働かざるを得なくなり、教育が受けられなくなり、悪循環になっています。
- ◆麻薬中毒や麻薬売買の問題は、山岳民族の人々にとって大変な問題なのだを再認識しました。そのような問題が貧困をもたらし、犯罪の発生や家庭の崩壊となってしまいます。そのため、子どもたちは教育を受ける機会がないまま、また同じことを繰り返してしまいます。なんとも深刻な問題であると思いました。



2 カンボジアにおける支援事業

カンボジア王国は、9世紀から13世紀まで現在のアンコール遺跡地方を拠点にインドシナ半島の大部分を支配していましたが、14世紀以降にタイ、さらにベトナムの攻撃により衰退しました。そして、1884年にフランスの保護領として「カンボジア王国」が建国されました。1953年、カンボジア王国としてフランスから独立し、1970年にロン・ノルたちの反中親米派のクーデターによりシハヌーク政権を打倒して王制を廃し、クメール共和制に移行しました。

1975年、親中共産勢力のクメール・ルージュとの間で内戦となり、クメール・ルージュが内戦に勝利して民主カンボジア(ポル・ポト)政権を樹立し、同政権下で大量の自国民が虐殺されました。その後1991年にパリ和平協定が成立し、国連カンボジア暫定機構(UNTAC)の監視下で制憲議会選挙が実施され、王党派のフンシンベック党が勝利しました。それによって新憲法が制定されて王制が復活、ラナリット第一首相(フンシンベック党)、フン・セン第二首相(人民党:旧プノンペン政権)の2人首相制連立政権を樹立しました。1997年、プノンペンで両首相陣営による武力衝突となり、ラナリット第一首相が失脚。1998年に第1回国民議会選挙でフン・セン首班連立政権が発足し、以後、5回の国民議会選挙が実施されてフン・センが勝利し、現在に至っています。



《現在のカンボジア事情》(2020年10月現在)

●カンボジア王国

1. 面積：18万1,000km²
2. 人口：1,530万人(2019年)
3. 首都：プノンペン
4. 民族：人口の90%がカンボジア人(クメール人)
5. 言語：クメール語
6. 宗教：仏教(一部少数民族はイスラム教)
7. 政体：立憲君主制
8. 通貨：リエル
9. 主要産業：サービス業(GDPの約42%)、工業(GDPの約32%)、農業(GDPの約25%)
10. GDP(名目)：260億米ドル(2020年、IMF推定値)
11. 一人当たりGDP：1,655米ドル(2020年、IMF推定値)
12. 貿易総額：(2020年、カンボジア商業省統計) (1) 輸出：172億米ドル (2) 輸入：186億米ドル
13. 主要貿易相手国：(2020年、カンボジア商業省統計)
 - (1) 輸出：米国(30.5%)、EU(18.6%)、中国(6.3%)、日本(6.1%)、英国(4.8%)
 - (2) 輸入：中国(37.7%)、タイ(15.2%)、ベトナム(14.1%)、EU(3.5%)、日本(3.4%)
14. 主要援助国・機関の支援額：(2020年推計値)(単位：百万ドル)

中国(421.6)、日本(336.5)、ADB(283.1)、世銀(140.8)、EU(90.3)、韓国(58.0)、米(43.9)
15. 在留邦人数：4,216人(2019年10月現在)
16. 在日カンボジア人数：15,656人(2020年6月現在)

小学校への教育支援を行う

● カンボジアの2校の新校舎を建設 (MIRC) ●



新校舎の工事着工セレモニーの様子

カンボジアの小学校の再建事業は、当協会（麗澤海外開発協会／RODA）の関連団体であるMIRC（モラロジー国際救援推進委員会）が2004（平成16）年3月に ترام・クラ小学校（コンポントム州コンボン・スヴェア郡）、2007（平成19）年に トム・オー小学校（コンポントム州サンダン郡）の2校の老朽化した校舎に代えて新校舎を建設し贈呈しました（本書71～72頁に関連記事を掲載）。

● ベン・ロヴィア・レー小学校の新校舎を建設 ●



完成したベン・ロヴェア・レー小学校の新校舎

2011（平成23）年9月、当協会がカンボジア教育支援事業として進めていたベン・ロヴィア・レー小学校（コンポントム州サントウック郡）の新校舎が竣工しました。この小学校はカンボジアの首都プノンペンから西北約300kmのところにあり、シャンティ国際ボランティア会（SVA）カンボジア事務所の建設協力により同年3月18日に着工したものです。9月に竣工した後、12月21日に同校で小学校贈呈式が行われ当協会からは堀内一史理事が出席しました。



ベン・ロヴェア・レー小学校校長から感謝状贈呈



贈呈式の午後から行われた式典には、SVAプノンペン事務所長とスタッフ、コンポントム州の行政関係者、教育関係者、カンボジア人僧侶、住民、教員・児童等、約400名と多くの方々の参列があり、村の教育発展に対する関心の高さが感じられました。

式典は小学校の校庭で行われ、僧侶による読経、カンボジア国歌斉唱で始まりました。その後、コンポントム州代表より当協会に対して、メダルや感謝状が授与され、村人や子供たちに囲まれ、非常に温かい雰囲気が進められました。当協会からは、ノートや鉛筆などの文具類、またサッカーボールなども贈呈しました。子供たちは、嬉しそうな顔でボールを抱えていたのが印象的でした。



新校舎前でテープカット



◀ 記念プレート



新校舎前で教員・児童と記念撮影